

清泉女子大学キリスト教文化研究所年報 第23巻 平成27年
Journal of the Research Institute for Christian Culture, Seisen University, Vol.23, 2015

インディアノの富への眼差し — スペイン・バロック期演劇における表象 —

フリアン・ゴンサレス＝バレラ（セビーリャ大学）
（翻訳・解題 長野 太郎）

La riqueza desnuda del indiano: retratos del teatro barroco español

Julián González-Barrera
(Traducción e introducción por Taro NAGANO)

はじめに

以下に掲載するのは、2014年11月20日に清泉女子大学キリスト教文化研究所とスペイン語スペイン文学科の共催で実施されたフリアン・ゴンサレス＝バレラ博士講演会原稿の和訳である。

ゴンサレス博士は1978年スペイン南部セビーリャ市の生まれで、両親とも大学教授という学者一家に育った。スペイン黄金世紀演劇で文学博士号を取得し、現在はセビーリャ大学で教鞭をとる新進気鋭の研究者である。母国の古典文学の分野で学問の道に邁進して来たゴンサレス博士だが、心中ひそかにあたため続けて来た思いがあった。それが極東の異国、日本への憧憬である。セビーリャ大学で学生たちにまじり日本語の授業に出席しながら、その思いを醸成して来た博士は、2013年4月、セビーリャ大学から日本の大学との協定交渉の任務を得て、2週間ほど日本の地を踏んだ。ゴンサレス博士と清泉女子大学とのつながりもそこから始まった。翌年、なんとしても日本でもっと長く生活したい思いに駆られた博士は、勤務先の授業をやりくりし、夏以降の半年を在外研究にあてることを決めた。受け入れ先として清泉女子大学のキリスト教文化研究所を選び、2014年12月現在は同研究所客員研究員として研究に専念する毎日である。

講演会当日は、あいにくの天気で、しかも学内の会議が連続するという

悪条件が重なった。それにもかかわらず、学内外から多くの参加者があり、大変な盛況であった。与えられた時間は通常の授業と同じ90分、そこにスペイン語での講演、日本語訳、質疑応答を収めるために、通訳を担当した筆者から博士にお願いし、オリジナルの原稿をおよそ3分の2に短縮してもらった。なおかつ、「金、猿、オウム：黄金世紀演劇におけるインディアノ像」という原題が、広報宣伝向けには不相当との竹田キリスト教文化研究所長の判断から、「黄金世紀演劇におけるインディアノ像—新大陸成金に対する憧れと嘲りの眼差し—」という日本語タイトルを訳者が決定した。ただし、この時点では講演内容全体に眼を通していたわけではなく、内容を正確に伝えるものとは言えない。本紀要掲載に際しては、原著者の意向をうけて、表題に示されたものに変更したことをお断りしておく。

講演は、スペイン・バロック期演劇におけるインディアノ、すなわち新大陸に渡ってから帰国したスペイン人の表象をめぐる内容である。ゴンサレス博士は2008年にアリカンテ大学から、*Un viaje de ida y vuelta: América en las comedias del primer Lope (1562-1598)* (『往復の旅—ロペ・デ・ベガの初期喜劇におけるアメリカ大陸(1562-1598)』)と題した単著を出版している。本講演はその延長線上にあると言えるだろう。

インディアノと呼ばれた人々は、当日の質疑応答でも明確にされたとおり、新大陸からの移住者ではなく、あくまでスペイン生まれの帰国者である。新大陸に生まれたスペイン人は「クリオーリョ」と呼ばれる。スペイン本国の人々にとって、インディアノは自らと同じ文化的背景をもちながら、どことなく怪しげで、風変わりな言葉遣いをして、異国情緒あふれるものに囲まれた存在であった。初期のインディアノは常に富と直結したイメージで描かれた。しかし17世紀になるころには、落ちぶれたインディアノも登場するようになる。とは言え、庶民の眼差しのなかにあるインディアノ像は一貫して胡散臭い存在であることに変わりはなく、そうした諸相を時代的変遷と関連付け、演劇作品から丹念に読み取っていく部分が、当日の講演内容のもっとも興味深い部分であった。

あまり日本ではなじみのないスペイン古典演劇をめぐる講演であったにもかかわらず、当日は聴衆から多くの質問があがり、活発な意見交換がおこなわれた。講演原稿を補足する意味でそのいくらかを採録しておく。

まずあがったのが、インディアノの社会的イメージをめぐる質問であっ

た。スペインの歴史において、インディアノは19世紀にいたるまでの様々な時期に存在した。出かけた場所や時期は異なっても、インディアノは常に社会的に負の記号をまとった存在であったとゴンサレス博士は指摘した。

また、同時代のイギリス演劇、なかでもシェークスピア劇に見られるような登場人物の内面性がスペインのバロック演劇にも見られるかという質問に対しては、庶民から王侯貴族まで多様な観客を楽しませることが目指されたバロック演劇では、登場人物はアクションによって物語る。登場人物の内面性が重視されなかったところがシェークスピア劇との違いであるという回答であった。

それとも関連して、「笑い」の意義についての質問もあがった。それに対する回答は、まさしく、笑いこそが演劇を成立させる基本要素であり、笑いによって観客を楽しませることが一貫して目指されたとのことだった。

スペイン語スペイン文学科OGからは、現代スペインの口語において、本来サルを意味する"mono"が「可愛い」という意味の形容詞で用いられるが、講演で触れられた富の象徴としてのサルとの関連性はあるかという質問があがった。それに対しては、意味内容は時代による変遷があるものの、そうした表現の起源が講演で扱われた時代の社会状況にあり、そこが興味深い点であるとの指摘だった。

最後に、キリスト教文化研究所客員所員として、現在取り組んでいる研究テーマについての質問でもって会は締めくくられた。現在、ゴンサレス博士は清泉女子大学の図書館に日参し、バロック期の劇作家ロペ・デ・ベガが日本におけるキリスト教布教をめぐる書いた著作『信仰の勝利』の歴史的背景の調査をおこない、研究成果をまとめつつある。詳しくは博士の今後の論文発表が待たれるが、どうやら背後にはイエズス会とドメニコ会の確執が透けて見えてくるらしい。大いに興味をそそられる発見である。

(スペイン語スペイン文学科 長野太郎)

<Resumen>

La riqueza desnuda del indiano: retratos del teatro barroco español

Julián González-Barrera
(Universidad de Sevilla)

Una de las figuras más atractivas del teatro español del Siglo de Oro es el indiano. Desde un punto de vista social, se trató de un elemento difícilmente clasificable dentro de los rígidos parámetros de los siglos XVI y XVII. Una minoría que después de su aventura americana o asiática regresaba a España con una inmensa fortuna. El indiano pasaba entonces a integrarse dentro de una sociedad que lo contemplaba con una mezcla de envidia, extrañeza y admiración. Un personaje que a pesar de su riqueza, es frecuentemente burlado en el teatro, ya sea por los criados, que se ríen de su simpleza, como por las damas, que acabarán eligiendo por amor y no por interés al verdadero objeto de su pasión: el galán.

近年、ルシアノ・ガルシア・ロレンソ¹によって編纂された一連の書物の影響もあり、コメディア・ヌエバ(Comedia Nueva)と呼ばれる、黄金世紀演劇における登場人物の分類が、再び注目を集めています。たとえば、道化役とは何か、王の演劇的役割はどのようなものか、といったことです。とはいえ、マイナーなキャラクターへの注目はさほどではありません。しかし、何はともあれ、黄金世紀演劇のもっとも魅力的な登場人物のひとつがインディアノ、すなわち新大陸成金であると言えるでしょう。喜劇的観点から言うと、この登場人物は、ロペ・デ・ベガの登場まではほとん

1 ルシアノ・ガルシア・ロレンソはバロック演劇の登場人物をめぐる下記のような書物を編纂し、それらはすべてマドリッドにある出版社フンダメントから出版されている。*La construcción de un personaje: el gracioso*, 2005; *El teatro clásico español a través de sus monarcas*, 2006; *El figurón. Texto y puesta en escena*, 2007; *La madre en el teatro español clásico. Personaje y referencia*, 2012.

ど先例がなく²、ロペ・デ・ベガこそ、インディアノをコメディア・ヌエバの登場人物のレパートリーに付け加えた立役者でした。この登場人物は、演劇潮流の変化をまたいで生き延び、一部の研究者によると、別のキャラクターであるフィグロン³、つまり「気取り屋」の先輩にあたる存在でした。しかし、インディアノの持つ魅力もそれに劣ることはなく、16世紀から17世紀にかけての厳格な時代においては型破りといつてよいような、新奇で、目をひく、分類の難しい存在でした。新大陸アメリカにおける冒険からスペインに戻ったインディアノは、良きにつけ悪きにつけ、奇異の目にさらされつつ、社会の一角を占めるに至ったのでした⁴。彼は素性の怪しい人物で、高貴な血をひいていないために貴族からは受け入れられず、他方で、一般民衆からも、セルバンテスが「やけっぱちの駆け込み寺」と呼んだ場所に出かけた理由が透けて見えるがゆえに、敬遠された存在でした。このことについて、アメリコ・カストロは次のように述べています。

イベリア半島にとどまった人々にとって、新大陸の意味合いは明白だった。新世界で富を築くことは、血筋の正しさに疑問をなげかけることであり、インディアノは、私欲と蓄財を追求するユダヤ人と同一視されることになるのだった⁵。

通常、インディアノは疑いの眼差しで見られることが多く、新大陸に渡る人々は訳ありの過去を持ち、下手をすればお尋ね者であると信じられていました。ロペ自身、身をもって、それを経験していました。彼の両親が

2 ロペ以前の典型的インディアノ像としては、フアン・デ・ティモネダが短編の中で描いたような、絹の服をまとい、黄金をぶら下げた姿があげられる。

3 次を参照のこと。Héctor Briosos Santos, «¿Trajisteis este animal de las Indias?: el figurón, el indiano y lo americano en *Guárdate del agua mansa* de Calderón», en *Calderón: innovación y legado. Actas selectas del IX Congreso de la Asociación Internacional de Teatro Español y Novohispano de los Siglos de Oro, en colaboración con el Grupo de Investigación Siglo de Oro de la Universidad de Navarra*, eds. Germán Vega García-Luengos e Ignacio Arellano, Nueva York, Peter Lang, 2011, p. 33, n.l.

4 インディアノはアメリカだけではなく、アジアの国からの帰国者を指す場合もありえた。

5 Américo Castro, «Sobre lo precario de las relaciones entre España y las Indias», en *Cervantes y los casticismos españoles*, Barcelona, Alfaguara, 1966, p. 322.

亡くなったあと、債権者のひとりが一家のつつましい資産を精算し、「ならず者たちの避難所」と化したアメリカ大陸に高飛びしました。晩年になってもなお、戯曲『ラ・ドロテア』の一節で、ロベは苦々しく、そのできごとをふり返っています。

フェルナンド：両親が死んだあと、財産の一部を要求する男が、できる限りの金を引っつかんで新大陸に渡り、私は一文無しになりました。新大陸には、忌まわしい思い出しかありません。ふつうは財をなしに出かける場所ですが、私の場合はそこへ持ち逃げされたのです⁶。

とはいえ、ロベの不遇はこれにとどまりませんでした。ロベ・デ・ベガの人生には、3人のインディアノが影を投げかけたことが知られています。最も若い頃の出来事として有名なのが、恋人エレナ・オソリオを奪われ、裁判沙汰の上に、カステーリャ王国追放という辛酸をなめるきっかけを作った、フランシスコ・ペレノー・グランベラという男でした。第二の人物は、彼が恋い焦がれたミカエラ・デ・ルハンの夫、ディエゴ・ディアスでした。もっとも、このときは恋敵が死んで、思いは遂げられました。そして最後に、老年期にさしかかったロベは、また別のインディアノ、詩人ファン・ルイス・デ・アラルコンと対立し、宮廷における成功をめぐって争ったのでした⁷。

インディアノと言え、その独特な話し方が特徴のひとつでした。古めかしく、でたらめで、先住民言葉が入り交じった話し方は、まもなくロベによって芝居の中に取り入れられたことが⁸、モリニゴ教授の古典的研究や、その他最近の研究によっても明らかにされています⁸。かくして、17世紀初

6 Lope de Vega, *La Dorotea*, ed. Donald McGrady, Madrid, Real Academia Española, 2011, p. 256.

7 ロベ・デ・ベガがメキシコ帰りの詩人アラルコンへの宮廷における寵愛を嫉妬していたのはよく知られている。とくに、インディアス顧問会議議長であるサリーナス侯爵、ドン・ルイス・デ・ベラスコとの交友のおかげである。それにひきかえ、ロベの方はパトロンであったセッサ公爵が有力者オリバレス伯侯爵と敵対したことによる失脚が原因で、追放を余儀なくされた。

8 Marcos Morinigo, «Indigenismos americanos en el léxico de Lope de Vega», *Revista nacional de cultura*, 84, 1951, pp. 72-95; Elvezio Canonica, *El poliglottismo en el teatro de Lope de Vega*, Kassel, Edition Reichenberger, 1991, pp. 462-476; Julián González-

頭、ロペ・デ・ベガは戯曲『感謝する恋人 (*El amante agradecido*)』の中で、南米先住民ケチュアの言葉を登場させ、見事な翻訳までつけて見せたのでした。

グスマンシージョ：あれなる黄金の杯は、
 それ自体宝物であり、
 あの方への贈り物にふさわしいものだが、
 その中には、コンチチ・コリー、
 すなわち砂金のたぐい、
 その他有り難きもの、
 ヒヤシンス鉱といった宝石、
 そしていくらかのプカ・ムユー
 当地で言うところの珊瑚がつまっているのだ。
 ルイス：(インディアノがしゃべる)⁹

インディアノのしゃべり方は、当時のスペイン人にとって、奇妙であると同時に滑稽であったに違いありません。もちろん、言語学的真実からはほど遠い、インパクトを狙ったものに過ぎなかったことは言うまでもありません。

コメディア・ヌエバで、とくにロペが活躍した時代において、インディアノと言えば金持ちで、お人好し、ほれっばい男の代名詞でした。したがって、女性の愛情をめぐってしばしば強力なライバルとして登場し、それでいて、いつも鴨を待ち受けている召使いや奥方たちに、いともたやすく操られてしまいます。

ファブリシオ：わが主人はインディアノであり、
 きわめて富裕な優男だ。
 フェリシアノどののかわりに

Barrera, *América en el teatro del primer Lope de Vega (1562-1598)*, Murcia, Universidad de Alicante, 2008.

9 Lope de Vega, *El amante agradecido*, en *Obras completas. Comedias*, VIII, eds. Jesús Gómez y Paloma Cuenca, Madrid, Turner (Biblioteca Castro), 1994, p. 82.

据えてやるわけにはいかないだろうが。
 インディアノとは、獣のようなやからで
 女と見れば誰でも惚れてしまう。

クララ : では、ファブリシオ、この魚を
 えさまで連れてきてくれたなら
 何も知らないうちに
 身ぐるみはがれて
 あんたもおこぼれにあずかれるでしょう¹⁰。

もっとトーンの弱まった、ステレオタイプにとどまらない人物造形が現れるのは、17世紀中盤のカルデロンの時代を待たねばなりません。とはいえ、この時代の喜劇において、インディアノ像が固定的であったわけではなく、ロベにおいても、劇中の設定によっては、インディアノがポジティブな描き方をされることもありました¹¹。実際、豊かなインディアノと、一文無しのインディアノのどちらもが舞台に登場したのですが、少なくとも、初期において、アメリカ大陸における冒険から文無しで帰ったインディアノなどが、劇作家の関心と呼ぶことはまれでした。

黄金世紀のスペイン社会において、求愛、施し、贈り物が恋愛にはつきものでした。したがって、インディアノの持つ富は、主人公である色男にとって、恐るべき武器となりえました。万が一、インディアノがしみったれである場合には、本国人に比べて、高潔で情熱的だなどと、おべっかを使われ、恋愛は黄金の友であるなどとアドバイスをされるのでした。

ドロテア：こちらと比べて新大陸には
 恋愛があふれており、
 真実にもあふれています
 暑さもそれに引けをとらず

10 Lope de Vega, *La prueba de los amigos, en Obras escogidas*, ed. F. Sainz de Robles, Madrid, Aguilar, 1991, I, pp. 1441-1442.

11 たとえば, *La prueba de los amigos*, *El premio del bien hablar*, *La esclava de su galán* などの戯曲におけるインディアノ像を比較されたい。ただし、最初のものでは、インディアノを気取っているだけである。

だから、愛の神アモールは子どもで、裸で
黄金の友なので、
新大陸に渡ったのだと思います¹²。

これだけではありません。『慎ましい主君に仕える (*Servir a señor discreto*)』『海賊から海賊へ (*De cosario a cosario*)』といった短い作品にも、同様のほめ言葉が登場しています¹³。この側面は、インディアノのステレオタイプにも愛すべき部分があったことを示す意味で、興味深いと言えます。こうした実直さや情けの側面はあまり報われず、最後はいつも色男が勝利を手にするのでした。

新大陸、インディアノ、富（とくに黄金）は、同じようなものとして現れるのが普通でした。黄金は、錬金術師がそうであるように、登場人物そのものと結びついていました。しかし、大金を持っていることは気前の良さとは別物でした。実際、インディアノはけちで有名でした。たいてい、彼らは贈り物を渋り、財布を開くのは、利子をともなう回収する期待のあるときだけでした。そのために、インディアノをこきおろす表現には事欠きません。

こうした守銭奴としてのインディアノを戯曲に描いたのは口ベだけではありません。カルデロン・デ・ラ・バルカが戯曲『穏やかな海にご用心 (*Guárdate del agua mansa*)』の中にそうした人物を登場させています。娘の結婚のためにメキシコからやってきた富裕なインディアノのアロンソは、マドリードの街に居を構え、その途方もない財産のうわさでもって、近隣住民の関心をひきます。

戯曲の中で、アロンソは苦労の末に財産を手にしたことを訴え、娘婿によってそれが浪費されることを心配しています。しかし、彼は、落ちぶれた下級貴族ではあるもののクアドラディージョスに領地を持つ、甥のドン・トリビオと娘の結婚に同意します。この喜劇をめぐる当時言われたよう

12 Lope de Vega, *La prueba de los amigos*, op. cit., p. 1445.

13 ルイス・キニョネス・デ・ベナベンテの書いた歌劇 *El Martinillo* (1634-1635) の第Ⅱ部では、ヨーロッパとアメリカ、利己的な旧世界と寛容な新世界の間で道徳的議論が関わされる。(cfr. Héctor Brioso Santos, «Lo peor de ambos mundos: dos entremeses americanos de Luis Quiñones de Benavente y Vicente Suárez de Deza», *Teatro (Alcalá)*, 15, 2001, pp. 227-250).

に、「成金の台頭によって、富と地位の結婚が必要となった」のでした¹⁴。

(アロンソ)：あの男によって
父祖伝来の資産をふくらまそう
金ならば、私にはある。
このようにして
血と財産をかけ合わせ
両者ともに
クアドラディージョの領地を
繁栄に導くのだ (…)¹⁵

もうひとつの、インディアノをめぐる色眼鏡は、首都マドリードの賑わいについていけないというものでした。マドリードの生活のリズム、喧噪、風習は彼らを当惑させ、とくに宮廷では何か行政上の手続きをとろうとすると厄介でした。このために、時には現地の案内人をともなって登場し、どこに行って何をすればよいかを教えてもらうのでした。当然、舞台の上では、こうしたいかわしいガイドが恋愛の仲介人におさまリ、公私を問わず、ありとあらゆる局面で、主人からできるだけ金をせしめようとするのでした。

演劇に現れるインディアノは、いつも疑わしく、否定的な存在であるわけではありません。すでに見たように、スペインに持ち帰った莫大な資産は大きな魅力となり、とくに女性にとってはそうでした。金もうけを批判するような文脈では、インディアノは必ずしも悪者とは限りませんでした。時には、登場人物が正論を述べて、自己を正当化することもありました。戯曲『よき弁舌の報い (*El premio del bien hablar*)』などがそうです。インディアノの娘が次のように言います。

14 Ysla Campbell, «Aspectos ideológicos en *Guárdate del agua mansa*», en *Teatro calderoniano sobre el tablado. Calderón y su puesta en escena a través de los siglos. XIII Coloquio Anglogermano sobre Calderón. Florencia, 10-14 de julio de 2002*, ed. Manfred Tietz, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 2003, p. 44.

15 Pedro Calderón de la Barca, *op. cit.*, p. 1293.

(レオナルダ)：わが父は
 ビスカヤの名家の生まれ
 新大陸に出かけたからと言って
 何の不名誉なことがありますか？¹⁶

社会集団としてみた場合、インディアノには独自の標識があり、そうしたものは家の扉、格子窓、バルコニーなどに表現されました。もちろん、演劇にもそれは現れました。そうした標識のなかでもとくに、海を越えてもたらされた、持ち主以上にエキゾチックな所有物がありました。サルやオウムは、華やかな新大陸帰りの証であり、有閑階級の興味をひきました。

イポリタ：それは何？
 ロベルト：オウムと
 かの名高きサルだ。
 イポリタ：何ですって？
 ロベルト：しゃべりこそしないが
 下僕をひとり食べ
 おまけに
 セビーリャでは11人の子どもを食らい
 縛り首にされかかったサルだ¹⁷。

アメリカ大陸の新奇な風物は、金、銀、宝石同様に、セビーリャの港を埋め尽くしました。ガレオン船は物珍しい動植物を満載して戻り、上流階級の人々の欲望をかき立てました。スパイス貿易との関係で、それまで個人の収集癖といえばポルトガル船がアフリカから持ち帰るものが大半を占めていました。たとえば、国王フェリペ二世は造園趣味に加えて、カサ・デ・カンボにヨーロッパ随一の野生動物コレクションを持っていました。さら

16 Lope de Vega, *El premio del bien hablar*, en *Obras escogidas*, ed. F. Sainz de Robles, Madrid, Aguilar, 1991, I, p. 1253.

17 Lope de Vega, *El castigo del discreto*, en *Obras completas. Comedias. VII*, eds. Jesús Gómez y Paloma Cuenca, Madrid, Turner (Biblioteca Castro), 1994, p. 226.

にアランフェス宮殿にも小動物園がありました。

メスザルは、インディアノに人気のあるペットでしたが、わざわざアメリカまで出かけなくても、黄金さえ支払えば、セビーリャでも買うことができました。サルは、新大陸に出かけた経験のない人々にとっても、贅沢の象徴でした。サルの身振り、しかめ面、とんぼ返りは、人々の人気をよび、人だかりができるほどでした。

(レボジェド)：いくら勧められても

有名人などには興味がないが

サルと聞いたなら

30 回でも見に行きたい¹⁸。

しかし、サルがどんなに利口でも、決して放し飼いにはせず、ブリューゲル父の有名な絵に描かれたように、鎖でつながれていました。サルは、子どもたちにも大人気でした。子どもたちはサルに鏡を見せる遊びをしました。最も大胆な子どもが鏡を手にサルに近づき、サルの目の前にそれを置きます。鏡を見たサルは、別のサルがいると思い、金切り声をあげ、飛び跳ね、しかめ面をします。それを見て、子どもたちは大笑いするのでした。

そうした珍しい動物を見に行くのはとてもありふれたことだったようで、多くのはやり言葉を生みました。作者不詳の戯曲『ゴロンドリーノ少年と2人の友人の寸劇 (*Entremés entre un muchacho llamado Golondrino y dos amigos suyos*)』では、3人の登場人物がこんなことを話しています。

アンヘラ：ちょっと待って、ビセンテ・アラゴネス、何と言ったの。

ゴロンドリーノ：待ってくれ、あれは誰だろう、見てみよう。

悪党：何を見ている、おれがサルにでも見えるか?¹⁹

18 Lope de Vega, *Arauco domado*, en *Obras completas. Comedias*, IX, eds. Jesús Gómez y Paloma Cuenca, Madrid, Turner (Biblioteca Castro), 1994, p. 802.

19 Anónimo, *Entremés entre un muchacho llamado Golondrino y dos amigos suyos*, en *Colección de entremeses, loas, bailes, jácaras y mojigangas desde fines del siglo XVI*

オウムの人気もサルにおくれをとっていませんでした。オウムは言葉をしゃべると思われていました。インディアノをめぐる肖像画や描写では、その経済力の証として、サルやオウムがつきものでした。

オウムはきれいな色の羽を持ち、くちばしが大きく、優雅な鳥です。しかし16世紀のスペイン人にとって、オウムの魅力はそこにはありませんでした。人間の声を真似する能力こそが、飼い主やその他の人々を驚かせたに違いありません。早い時期から、裕福な飼い主を楽しませるために、「誰が通る?」「おまえは誰だ?」といったフレーズをオウムに教え込むことが流行しました。一般人にとって、音声を真似る能力は驚きの種でした。ティルソ・デ・モリーナの戯曲『愛と嫉妬が分別を与える (Amor y celos hacen discretos)』を始め、多くの戯曲がそうしたテーマを取り上げています。

ロメロ：おお、麗しきレオノール！

帰られてほっとした。

オウムのようによくしゃべられるお方だ²⁰。

「オウムのようにしゃべる」という表現は、人口に膾炙していたに違いありません。多くの戯曲に取り上げられただけでなく、1611年に出版されたコバルビアスの『カスティーリヤ語辞典』でも、「意味を考えず、理解しないで話す」という意味で採録されています。

サルと同じように、黄金世紀にはオウムがセビーリヤの市場でも販売されました。やはり目の飛び出るような値段がつき、誰にでも買えたわけではありませんでした。その結果、オウムはインディアノに限らず、お金に余裕がある人々の持ちものでした。実際、戯曲のなかで、他の登場人物にともなって登場することもありました。

もちろん、途方もない富には、嘲笑、皮肉、愚弄がつきもので、インディ

a mediados del XVIII, ed. Emilio Cotarelo y Mori, Madrid, Bailly-Baillière, 1911, I, p. 77.

20 Tirso de Molina, *Obras dramáticas completas*, ed. Blanca de los Ríos, Madrid, Aguilar, 1946, I, p. 1428.

アノは、短い芝居の中でも屈辱的な役割を与えられました。若ければ、劇団の道化役が演じました。年寄りであれば、身体的な欠陥があるか、さもないければ間抜けな老人として描かれました²¹。

話をしめくくる前に、後期のインディアノ像に触れておかねばなりません。文学と言うよりも、歴史上の変遷です。しっかりと根付いた伝統にもかかわらず、17世紀の後半から傾向が変化し、別の種類の、貧しく、文無しで、困窮したインディアノが舞台に登場するようになります。誤解してはなりませんが、舞台に登場するインディアノの大半は金持ちです。しかし、たとえばビセンテ・スアレス・デ・デサ・イ・アビラの滑稽劇（モヒガンガ）『結婚（*Los casamientos*）』には、貧しく、うぬぼれ屋の次男坊、宮廷の作法を知らない兵士で、結婚のために故郷に帰る男が登場します²²。おなじみの宮廷の作法を知らない無骨なインディアノの類ですが、こんどは貧しさという要素が付け加わっています。

同じように、バロック末期になって、1691年の作者不詳の幕間喜劇『アランベル家の人々（*Los Arambeles*）』では、衣食よりも家柄を気にする老いたインディアノが登場します。彼は息子トリビオと会うためにスペインに戻ってきます。ブタに囲まれて育ったとはいえ、息子は「ドン」の敬称をつけて呼ばれる身です。召使いを従え舞台に登場した老人は、ほろほろの身なりのために、富裕なインディアノというより乞食の従者にしか見えません。それを息子があてこずります。

ドン・アランベル：おぬしに会いに

身を粉にしてやってきたのじゃ。

トリビオ：よく分かりますとも、お召し物まで
ずたずたですからね。

ドン・アランベル：仕立て人の仕業じゃ。

21 Daisy Ripodás Ardanaz, *Lo indiano en el teatro menor español de los siglos XVI y XVII*, Madrid, Atlas, 1991, pp. XXV.

22 Edith Villarino y Elsa Fiadino, «La figura del indiano en obras breves del Siglo de Oro», en *España. Actas del III Congreso argentino de hispanistas*, eds. Luis Martínez Cuitiño y Élica Lois, Buenos Aires, Instituto de Filología y Literaturas hispánicas “Dr. Amado Alonso”, 1993, II, p. 990.

トリビオ ：時のナイフで引き裂かれたご様子²³。

16世紀末の登場人物がこのような発展をとげたことについて、一部の研究者は、ステレオタイプが飽きられたためだと考えます。作者の意向だけで登場人物が形作られるとでもいうかのように。しかし、民衆の嗜好に忠実だったロペ以降の黄金世紀の劇作家たちは、一般民衆の動向を忠実になぞろうとしていました。そして、これまで、私の知る限り、研究者が注目してこなかったことは、初期の文学に描かれた、裕福でこれ見よがしなインディアノは、17世紀半ばになるとマドリードやセビーリャの街では、絶滅寸前の存在だったことでした。

17世紀が進むにつれ、新大陸から持ち込まれる富は減少しました。とくに1625年頃からそれが顕著になります。新大陸征服は、かりに完結していないにせよ、一段落ついてしまいました。1604年のイングランドとの和平は、カリブ海からの海賊一掃とはいわず、貴金属の流入は目に見えて減少しました。さらに16世紀における貴金属の供給過剰がインフレに輪をかけ、銀の市場価格は生産コストに見合わないほど低落しました。たかだか50年で新大陸の富は三分の一に減少し、それにともなって故郷へ錦を飾るインディアノの数も少なくなったに違いありません。17世紀初め以降、それに拍車がかかりました。おそらく、貧困を脱するためにスペインに戻った、物欲しげで、ずる賢く、金を無心する新しいインディアノ像は、当時のマドリードでありふれた存在だったに違いありません。

つまり、こうした第二のインディアノ像は、ロペが描いたような、金にものを言わせ、戸口にサルをつなぎ、肩にはオウムを留ませた第一のインディアノ像の変わり果てた姿だったのです。

23 Daisy Ripodás Ardanaz, *op. cit.*, pp. 205 y 209.

